

ザビエルを日本に送った アヴァン船長の悲劇

奥 正敬

今から463年前の1549（天文十八）年に来日したフランシスコ・ザビエル（Francisco Xavier, 1506-1552）は、わが国でキリスト教を広めただけでなく西洋の文化を移入する道を拓きましたが、彼の日本への渡航は大変厳しいものでした。

その様子は鹿児島から発信していた数通の書簡に綴られており、没後、幾つかのヨーロッパ言語で刊行された『書簡集』に収録されています。日本では河野純徳氏によって翻訳された書物⁽¹⁾で確認することができます。ここでは、その翻訳を中心にして、ザビエルと彼を日本に送り届けた明国（中国）人船長との心の葛藤の様子を思い浮かべてみたいと思います。

■ザビエル、日本渡航を計画する

1540年、ザビエルが所属するイエズス会はローマ教皇によって修道会として承認され、翌1541年の4月7日、彼は35歳でリスボン港からアジアに向けて出発しました。この年はポルトガルのバスコ・ダ・ガマによって喜望峰経由のインド航路が拓かれ既に43年が経過しており、同国はインドのゴアにアジア植民の一大拠点を築いていました。

ザビエルはゴアへ到着すると精力的に任務を進め、1545年には遙か東のマラッカに渡って布教をしています。また、翌年にはボルネオの東にあるモルッカ諸島にも赴きましたが、その帰路、ザビエルはマラッカでアンジロウ（ヤジロウとも言う）ら三人の日本人と出会います。アンジロウは故郷、鹿児島を出奔してマラッカに滞在していたと考えられています。ザビエルは彼らと接する中で日本への意識を高め、アンジロウらを同行してゴアへ戻りました。ここでは、ザビエルの不在中にもイエズス会から宣教師が派遣されて布教体制が強化されていました。ザビエルは洗礼を受けたアンジロウやスペイン人

コスメ・デ・トーレス神父、ファン・フェルナンドス修道士らを伴った日本渡航を計画します。

■マラッカのポルトガル勢力

1549年の4月15日、ザビエルはゴアを出発して日本に向かいました。途中に立ち寄ったマラッカはザビエルにとっては再来の地ですが、ここから先、日本へ行く船はなく、ザビエルはこの地のポルトガル長官の尽力を請うことになります。

この頃、マラッカはゴアに次ぐポルトガルの重要拠点になっていました。15世紀初めからイスラム商人によって繁栄していた王国で、歴代の王は早くからこの海峡を支配してペルシャやインドとの交易を広げ、中国や琉球の船も出入りしていたといわれています。また、建国時から強力な勢力を誇るタイのアユタヤ王朝を牽制して、中国の明朝とは使節を派遣し合うなど特別な関係を築いていました。しかし、インドから勢力を東へ拡張していたポルトガルは1511年7月にマラッカに侵入し約一ヶ月の攻防の末、遂にこの地を支配下に置いたのです。その後、モルッカ諸島とゴアとの間を行き来する丁字貿易^{ちやうじ}のためのポルトガル船の寄港地になっていました。

■ザビエルを支援するポルトガル長官

ザビエルが1549年の6月20日にマラッカからポルトガル国王ジョアン三世に宛てた書簡には、同地のポルトガル長官であるドン・ペドロ・ダ・シルバはザビエルを歓待し「私たちがしようとしている渡航は神と陛下に大きな奉仕になるので、これを援助し手伝う」と述べたと記述し、日本に向かう船の準備はもとより、生活費や到着してからの支配者層への贈答品まで準備されていたことが書かれています。この長官の姿勢から宗教界だけでなく、ポルトガルの政官界も自国の勢力拡張のためザビエルの日本渡航に大きな期待を寄せていたことが窺えます。

この頃、マラッカに滞在するポルトガル人は、日本に出入りしたことのある商人⁽²⁾や日明貿易を通じて中国から入った情報などをもとに、